

介護福祉学生の自己教育力に関する研究

宮堀 真澄¹⁾ 鈴木 圭子²⁾ 三浦 正樹³⁾ 澤井セイ子⁴⁾ 佐藤 怜⁵⁾

A Study on the Ability of Self- Education of the Care and Welfare Students

Masumi MIYAHORI Keiko SUZUKI Masaki MIURA Seiko SAWAI Satoru SATO

要旨：本研究は、介護福祉士養成校の在学学生を対象に、自己教育力の横断的な調査を行った。介護福祉学生の自己教育力の構造を明らかにするため因子分析した結果、『目標意欲因子』・『プライド因子』・『自己肯定因子』・『行動統制喪失因子』・『内省因子』・『感情統制因子』・『発展意欲喪失因子』・『目標喪失因子』の8因子が抽出された。また、短大生は専門学校生より、自己教育力得点と、『自己肯定因子』の因子得点が高かった。反面、『発展意欲喪失因子』の因子得点も高かった。全学校の1年次生と2年次生では、『発展意欲喪失因子』・『目標喪失因子』共に、2年次生の方が得点が高かった。以上のことから、短大生の方が専門学校生より高い自己教育力を持っていると推測されるが、短大生・専門学校生共に、学年があがるに従って自己教育力が身につけているとはいえなかった。

キーワード：介護福祉学生、自己教育力、因子分析、横断調査

Summary : This study presents the result of the cross-sectional study of the care and welfare students on their ability of self-education. The results of the factor analysis to know the constitution of the ability of self-education are that eight factors of 'the goal desire factor' 'the pride factor' 'the self affirmation factor' 'the action control loss factor' 'the introspection factor' 'the feeling control factor' 'the development desire loss factor' 'the goal loss factor' were obtained. The points of the junior college students are higher in the ability of self-education, 'the self affirmation factor', and 'the development desire loss factor' in comparison with that of the professional school students. The points of 'the development desire loss factor' 'the goal loss factor' of second year students are higher than the first year students. It is conceivable that the junior college students have higher the ability of self-education than the professional school students from over. However, it is not able to say that the ability of self-education is acquired in accordance with the rise of the academic year, with both students.

Keywords : care and welfare students, ability of self-education, factor analysis, cross-sectional study

I. はじめに

1999(平成11)年3月に、介護福祉士養成教育課程の見直しにあたって、期待される介護福祉士像が厚生省(現厚生労働省)によって明示された。感性豊かな人間性と幅広い教養を身につけ、人のこころを共感的に理解できること、コミュニケーションを主体的に行って介護を必要とする人との信頼関係を築くこと、要介護者や家族の状況を洞

察し、個別的な介護の計画を立案・実践すること、その結果を客観的に評価し、修正する能力、介護を必要とする人の生命や人権を尊重し、自立支援の観点から介護を展開する実践家が求められている。更に、保健・医療・福祉従事者等と連携・協働し、介護サービスを総合的・一体的に提供する力量も必要とされている。

介護福祉士は、これらの資質の向上を図るため

介護福祉学科 1) 助教授 2) 講師 3) 教授 4) 秋田大学教授 5) 秋田大学名誉教授

本研究は、平成13年度日本赤十字秋田短期大学共同研究費助成によるものである。

に、介護福祉関係の専門的知識・技術のみならず、人間の生活にかかわり、生活に必要な専門的技術を発揮して支援をしていく専門職であるため、人間として成長するためのさまざまな学問や人生経験を積むことが必要であり、常に専門的な職業人として生涯を通じて成長していこうとする姿勢が求められており、そのためには、生涯教育という長いスパンが必要である。

また、卒業後も学習を継続していくためには、主体的に学ぶ意志・態度・能力、すなわち自己教育力が必要とされる。それゆえに介護福祉士養成教育において自己教育力を育成することが重要であると考えられる。

自己教育力は、新たな変化や課題に対処するために必要な能力であり、稲川¹⁾は「自己教育力とは『自分が』『自分を』教育し、『自分で』『自分を』教育する力である」と述べている。すなわち、自分の中には教育する自分と教育される自分とがあり、葛藤を通してより良い自分を形成する営みであると述べている。

また、梶田^{2) 3)}は自己教育性を①成長・発展への志向（達成・向上の意欲、目標の感覚と意識）、②自己の対象化と統制（自己の認識と評価力）、③学習の技能と基盤（学び方の知識と技能、基本的な知識・理解・技能）、④自信・プライド・安定性、の4側面から捉え、さらに自己教育を支える望ましい自己概念を提唱している。

介護福祉士養成教育における、介護福祉学生の自己教育力に関する研究は、木村⁴⁾らの「介護学生の社会的スキルの状況とその自己教育力に及ぼす影響」が一例報告されているのみである。

そこで本研究では、自己教育力に関連する質問項目を用いて、秋田県内の介護福祉学生を対象として調査し、自己教育力がどのように育まれているのか明らかにすることは、今後の介護福祉士養成教育のあり方を考える上で重要であると考えた。今回は、自己教育力に対する意識構造における短大生と専門学校生との違いや、学年別集団の特徴を検討した。

II. 研究目的

介護福祉学生の自己教育力に対する意識構造における学校間および学年別集団の特徴を明らかにする。

III. 研究方法

1. 調査対象

秋田県内の介護福祉士養成校である、A短期大学介護福祉学科在学者108名とB短期大学介護福祉学科在学者87名およびC介護福祉専門学校の介護福祉学科在学者83名と福祉専門学科3年課程の1・2年次生82名を対象とした。

2. 調査方法

1) 調査用紙

調査は、留置調査法により行った。ここでは、梶田²⁾が作成した30項目からなる「自己教育性調査票」を後述のように一部変更して用いた。「自己教育性調査票」は、自己教育性の「成長・発展への志向」「自己の対象化と統制」「自信・プライド・安定感」の側面を対象がどのように実現しているかをみるための調査票である。回答は2件法であり、「はい」に1点、「いいえ」に0点配点（逆転項目では逆の配点）される。30項目の合計点などで対象の自己教育性を評価し、高得点ほど自己教育性が高いと判断される。

本研究では、調査方法の検討時、2件法では回答しづらいとの意見が得られたため、回答は「非常にそう思う」「そう思う」「どちらとも言えない」「そう思わない」「全くそう思わない」までの5件法とした。また、「自分の志望する学校（高校・大学など）に、何とかして入学したい」の項目は、対象者が介護福祉士養成校の学生であることを踏まえ、先行研究⁴⁾を参考に、「自分の志望する進路にすすみたい」と変更した。

2) 調査手続き

A短期大学介護福祉学科生へは、調査開始時に、調査の目的を説明し、調査への協力を依頼した。B短期大学介護福祉学科生およびC介護福祉専門学校の介護福祉学科生と福祉専門学科生へは、教員を通じて調査の目的を説明してもらい、調査への協力を依頼した。学生へは、説明後質問紙を配布し、記入後直ちに回収した。

対象の属性として、学年・年齢・性別を調査し、回答は無記名とした。

3) 調査期間

調査期間は、平成14年7月から11月である。

4) 分析方法

自己教育力30項目は、「非常にそう思う」5点、「そう思う」4点、「どちらとも言えない」3点「そう思わない」2点「全くそう思わない」1点と点数化した（逆転項目は逆の配点）。

対象の自己教育力の構造把握のために、因子分析（直交回転、バリマックス法）を行った。抽出された因子の因子得点について、短大生と専門学校生との比較および全学校の学年間と各学校の学年間で平均値を比較した。

平均値の差の検定には、t検定を用いた。有意差確率は5%以下を有意とした。

IV. 結果

1. 対象者の属性（表1）

調査への同意を得られた学生数は、短期大学2校175人：A短期大学介護福祉学科生（以下、A短大生とする）－1年次生51名（98%）、2年次生49名（88%）・B短期大学介護福祉学科生（以下、B短大生とする）－1年次生44名（94%）、2年次生31名（78%）と、C介護福祉専門学校1校163人：介護福祉学科生（以下、C専門学校（介）生とする）1年次生40名（100%）、2年次生43名（100%）・福祉専門学科生（以下、C専門学校（福）生とする）1年次生43名（98%）、2年次生37名（97%）であった。対象の平均年齢は、全体で19.39歳であり、学年別の平均年齢に学校間での有意差はなかった。性別は、男子学生はA校23人B校26人C校53人の合計102人で女子学生は236人である。

表1 対象者の数と属性

学 校	学 年	在学者数	調査協力者数 (注1)	有効回答率 (注2)	男子学生数	平均年齢
A短大	1年次生	52名	51名 (98%)	100%	10人	18.76歳
	2年次生	56名	49名 (88%)	100%	13人	19.84歳
	合 計	108名	100名 (93%)	100%	23人	19.30歳
B短大	1年次生	47名	44名 (94%)	100%	14人	18.52歳
	2年次生	40名	31名 (78%)	100%	12人	19.77歳
	合 計	87名	75名 (86%)	100%	26人	19.15歳
C専門学校 (介)	1年次生	40名	40名 (100%)	100%	11人	18.35歳
	2年次生	43名	43名 (100%)	100%	8人	20.00歳
	合 計	83名	83名 (100%)	100%	19人	19.18歳
(福)	1年次生	44名	43名 (98%)	100%	18人	18.67歳
	2年次生	38名	37名 (97%)	100%	16人	21.16歳
	合 計	82名	80名 (98%)	100%	34人	19.92歳
合 計		360名	338名 (94%)	100%	102人	19.39歳

注1：在学者数を100とした割合

注2：調査協力者を100とした割合

2. 自己教育力の構造（表2）

介護福祉学生の自己教育力の構造を把握するため自己教育力30項目の得点を因子分析した。その結果、第1因子から第8因子まで抽出された。累積寄与率は、44.09%であった。

第1因子は、「社会に出てからよい仕事をし、多くの人に認められたい」「自分の能力を最大限生かすように努力したい」「自分でなければならないことをやってみよう」などで高い正の因子負

荷量がみられ、将来への期待・目標意欲を表していると解釈し、『目標意欲因子』と命名した。

第2因子は、「現在の自分に満足している」「自分に自信を持っている」「今のままの自分ではいけないと思う（逆転項目）」などの因子負荷量が高く、現在の自分に自信を持ち向上心を表していると解釈し、『プライド因子』と命名した。

第3因子は、「自分にもいろいろとりえがあると思う」「私は何をやってもだめだと思う（逆転

項目)「生まれ変わるとしたらやはり今の自分に 認識していると解釈し、『自己肯定因子』と命名
生まれ変わりたい」などの因子負荷量が高く、現 した。
在の自分をやや悲観的にみている反面、肯定的に

表2 自己教育力の因子分析

因子名	項 目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7	因子8
目 標 意 欲 因 子	12. 社会に出てからよい仕事をし多くの人に認められたい	0.746							
	8. 自分の能力を最大限生かすように努力したい	0.658							
	10. 自分でなければならないことをやってみたい	0.626							
	5. 他の人から尊敬される人になりたい	0.596							
	11. 自分がやり始めたことは最後までやりとげたい	0.533							
	13. 自分の志望する進路にすすみたい	0.472							
	9. 認められなくても自分の目標に向かって努力したい	0.385							
	3. 他人にばかにされるのは我慢できない	0.377							
	26. いやになった時でも、もうちょっと頑張ろうとする	0.346							
プ ラ イ ド 因 子	1. 現在の自分に満足している		0.786						
	2. 自分に自信をもっている		0.695						
	(7.)今のままの自分ではいけないと思う		0.463						
	6. 現在の自分が幸福だと思う		0.443						
自 己 肯 定 因 子	30. 自分にもいろいろとりえがあると思う			0.600					
	(27.)私は何をやってもだめだと思う			0.545					
	29. 生まれ変わるとしたらやはり今の自分に生まれ変わりたい			0.541					
	(28.)自分のことを恥ずかしいと思う			0.516					
喪 失 行 動 統 制 因 子	(14.)何のために勉強するのだろうかといやになる				0.608				
	(15.)ほんやりと何も考えずに過ごしてしまうことが多い				0.452				
	(4.)自分がいやになることがある				0.423				
内 省 因 子	17. 自分のよくないところを自分で考え直すよう心掛けている					0.652			
	20. 他の人から欠点を指摘されると自分でも考えてみようと思う					0.536			
	19. 自分のよいところ悪いところがよくわかっている					0.398			
感 情 統 制 因 子	22. 腹が立ってもひどいことを言ったりしない						0.654		
	18. 自分の考えや行動が批判されても腹を立てない						0.530		
	21. できるだけ自分をおさえて他人に合わせようとする						0.503		
喪 失 発 展 意 欲 因 子	(23.)疲れているときは何もしたくない							0.699	
	(24.)テレビをみてしまっ、勉強がやれないことがある							0.478	
	(25.)ちょっと嫌なことがあるとすぐ不機嫌になる							0.347	
喪 失 目 標 因 子	(16.)人の一生は結局偶然のことで決まると思う								0.261
	因子負荷量 2 利和	3.173	1.902	1.773	1.650	1.548	1.353	1.257	0.571
	寄与率 (%)	10.578	6.339	5.911	5.499	5.160	4.512	4.189	1.904
	累積寄与率 (%)	10.578	16.917	22.627	28.326	33.486	37.997	42.186	44.090

() がついている項目は逆転項目である。

第4因子は、「何のために勉強するのだろうか」といやになる」「ぼんやりと何も考えずに過ごしてしまうことが多い（逆転項目）」「自分がいやになることがある（逆転項目）」で高い正の因子負荷量を示し、設定した目標に近づく行動を起こせないでいることを表していると解釈し、『行動統制喪失因子』と命名した。

第5因子は、「自分のよくないところを自分で考え直すよう心掛けている」「他の人から欠点を指摘されると自分でも考えてみようと思う」「自分のよいところ悪いところがよくわかっている」で高い正の因子負荷量を示し、現在の自分を反省し欠点を改めようとすることを表していると解釈し、『内省因子』と命名した。

第6因子は、「腹が立ってもひどいことを言ったりしないようにしている」「自分の考えや行動が批判されても腹を立てない」「できるだけ自分をおさえて他人に合わせようとする」で高い正の因子負荷量を示し、自分の感情をコントロールしていることを表す因子と解釈し、『感情統制因子』と命名した。

第7因子は、「疲れているときは何もしたくない（逆転項目）」「テレビをみてしまって、勉強が

やれないことがある（逆転項目）」「ちょっと嫌なことがあるとすぐ不機嫌になる（逆転項目）」などの高い正の因子負荷量を示し、自己成長の意欲が失われていると解釈し、『発展意欲喪失の因子』と命名した。

第8因子は、「人の一生は結局偶然のことで決まると思う（逆転項目）」で高い正の因子負荷量を示し、目標を失っている傾向がみられ、『目標喪失の因子』と命名した。

3. 学校間の自己教育力の比較（表3）

短大生と専門学校生の自己教育力の合計点と、因子分析によって抽出された第1～8因子得点の平均値を比較した結果を表3に示した。

短大生と専門学校生の比較においては、自己教育力の合計点と『自己肯定因子』『発展意欲喪失因子』の因子得点の平均値に有意な学校間差がみられた。短大生は専門学校生より、自己教育力合計点（ $p = 0.001$ ）と、『自己肯定因子』（ $p = 0.001$ ）・『発展意欲喪失因子』（ $p = 0.028$ ）の因子得点が高かった。他の因子得点平均値に有意な学校間差はみられなかった。

表3 自己教育力の合計点と因子得点の平均値の学校間・学年間差

学校・学年		合計点	因子得点							
			目標意欲因子	プライド因子	自己肯定因子	行動統制因子	内省因子	感情統制因子	発展意欲喪失因子	目標喪失因子
全学年	短大	98.98 $p=0.001$	0.08	0.04	0.13 $p=0.001$	0.04	0.04	0.06	0.09 $p=0.028$	-0.01
	専門学校	94.80	-0.08	-0.05	-0.14	-0.05	-0.05	-0.06	-0.09	0.01
全学校	1年次	96.91	0.04	-0.04	0.04	0.00	0.04	0.03	-0.09 $p=0.03$	-0.07 $p=0.04$
	2年次	97.03	-0.05	0.04	-0.05	-0.00	0.04	-0.03	0.09	0.08
A短大	1年次	96.86 $p=0.002$	0.06	-0.17 $p=0.02$	-0.09	0.15	0.07	-0.04	-0.07 $p=0.001$	-0.06
	2年次	102.83	0.04	0.28	0.16	0.17	0.31	0.02	0.44	0.18
B短大	1年次	99.04	0.17	-0.02	0.32	-0.04	-0.11	0.17	0.02	-0.05
	2年次	96.29	0.02	0.10	0.15	-0.22	-0.22	0.15	-0.12	-0.14
C専門学校 (介)	1年次	94.25	-0.05	0.03	-0.11	-0.17	-0.22	0.02	0.26 $p=0.04$	-0.11
	2年次	96.60	0.01	0.02	-0.04	0.13	-0.11	-0.16	0.05	0.03
C専門学校 (福)	1年次	97.25 $p=0.003$	-0.02	0.02	0.05 $p=0.001$	-0.00	0.08	-0.03	-0.07	-0.08
	2年次	90.45	-0.32	-0.30	-0.53	-0.19	0.07	-0.08	-0.13	0.20

4. 学年間の自己教育力の比較 (表3)

全学校の1年次生と2年次生の自己教育力の合計点、各学校の1年次生と2年次生の自己教育力合計点と、因子分析によって抽出された第1～8因子得点の平均値を比較した結果を表3に示した。

全学校の1年次生と2年次生を比較すると、『発展意欲喪失因子』『目標喪失因子』の因子得点の平均値に有意な学年間差がみられ、他の6因子の因子得点平均値には有意な差はなかった。『発展意欲喪失因子』($p = 0.03$)・『目標喪失因子』($p = 0.04$)共に、2年次生の方が1年次生より得点が高かった。

A短大生の学年間の比較では、『プライド因子』($p = 0.02$)・『発展意欲喪失因子』($p = 0.001$)の因子得点の平均値は共に、2年次生の方が1年次生より得点が高かった。B短大生の学年間の比較においては、自己教育力の合計点と因子得点平均値に有意な差はなかった。C専門学校(介)生の学年間の比較では、『発展意欲喪失因子』($p = 0.04$)の因子得点の平均値が、2年次生の方が高かった。C専門学校(福)生の学年間の比較では、『自己肯定因子』($p = 0.001$)の因子得点の平均値が1年次生の方が高かった。

V. 考察

1. 介護福祉学生の自己教育力の構造

介護福祉学生の自己教育力の構造を明らかにするために30項目の質問に対する得点を因子分析した結果、8つの因子が得られた。これらの因子の意味を介護福祉学生の自己教育力という視点から検討する。

第1因子として抽出された『目標意欲因子』は、学生が将来こうありたいと願う比較的長期の目標あるいは短期目標を持ち、それを達成したいという意欲の表れの因子と言える。このような前向きな目的志向を持つことは、成長・発展への自己教育の基本となるものである²⁾。この因子で表わされる自己教育力を介護福祉学生が持つということは、教育機関を卒業後も自分自身で課題を見つけ目標を定め達成しようという意欲を持つことができることを表わしていると考えられる。

『プライド因子』、『自己肯定因子』は、現在の自分に対する自信やプライドを表している。自信やプライドは主体性の基であり²⁾、それにより自分の将来に対し自らが効力感を持つことができる。自己効力感を持ってはじめて目標へ向かうことが

可能となる。

『内省因子』、『感情統制因子』は、自己認識し、感情統制できるかの因子である。目標を持ち行動するためには、自分自身を認識する必要がある。自己認識で大切なことは、ありのままの自分を認識する姿勢である²⁾。自分自身を知るには、他者とのかかわりにおいて相手が自分をどう捉えているのか、素直に耳を傾ける姿勢が重要であり、社会性をもった自己認識・自己評価力が必要である。学生は、実習を経験することによって、自己を客観的に見つめる機会に多く遭遇し、自己を正しく認識するようになりありのままの自分を受け入れるようになると考えられる。

以上これらの成長・発達への自己教育の基本あるいは、自己教育力を支える力となる因子がみられた一方で、『行動統制喪失因子』、『発展意欲喪失因子』、『目標喪失因子』などの意欲喪失因子がみられた。このことに関しては、学校間・学年間の自己教育力の特徴も加味し考察する予定であり、今後も引き続き調査検討が必要であると考えられる。

2. 介護福祉学生の自己教育力の特徴

短大生と専門学校生の自己教育力の比較の結果、短大生の方が自己を肯定的に評価していた。自己覚知あるいは自分の感情を統制しながら、目標に向かっての達成意欲や行動を実施する力は、短大生も専門学校生も差はみられなかった。

介護福祉学生の自己教育力が介護福祉教育において育成されているか検討するため、学年間の自己教育力の差を検討した。今回の調査は横断調査であるため、学生の自己教育力の変化は言及できないが、2年次生の方が発展意欲が低いことが認められた。このことは実習での慣れない環境による緊張感や疲労感が強かったり、就職を目前に控え現実の社会に直面するため、また、自己の限界も見えてくるようになるためか、目標や発展意欲を喪失したと感ずるのではないかと推察される。

VI. 結論

秋田県内の介護福祉士養成施設校の短大生と専門学校生の自己教育力の横断的な調査の結果、以下のことが明らかになった。

1. 介護福祉学生の自己教育力の構造を明らかにするため因子分析した結果、『目標意欲因子』、『プライド因子』、『自己肯定因子』、『行動統制喪失因子』、『内省因子』、『感情統制因子』、

『発展意欲喪失因子』、『目標喪失因子』の8因子で構成されていた。

2. 学校間の比較では、自己教育力得点と、『自己肯定因子』の因子得点が短大生の方が高かった。反面、『発展意欲喪失因子』の因子得点も高かった。
3. 学年間の比較では、『発展意欲喪失因子』、『目標喪失因子』共に、2年次生の方が得点が高かった。短大生・専門学校生共に、学年が上がるにつれて自己教育力が身につけているとは必ずしもいえなかった。

Ⅶ. おわりに

今回の調査研究は、概要把握するために横断的な研究であるため、学生の自己教育力の変化までは十分に検討できなかった。したがって、今後は時系連的に、入学して間もない時期と、実習前・実習を経験してから介護福祉をどのように捉え、介護福祉士のイメージがどのように変化したのか、そのことが自己教育力にどのように影響していくのかについて検討し、介護福祉学生の自己教育力の育成に影響する要因、または自己教育力を促進する方法について今後検討していく必要があり、さらには、教育の効果を長期的に検討するために、卒業後の変化も追跡的にみていく必要があると考えている。

最後に本研究を行うにあたり、調査に協力して頂いた介護福祉学生の皆様、および各介護福祉士養成校の先生方に、深く感謝するしだいである。

引用文献

- 1) 稲川三郎：自己教育力を育てる指導の実際，pp70，黎明書房，1987.
- 2) 梶田叡一：自己教育力への教育（12版），pp50-52，明治図書出版，1994.
- 3) 梶田叡一：自己教育の構造と力—自己概念の視点から—，pp31-32，教育心理学年報29，1990.
- 4) 木村久美子他：介護学生の社会的スキルの状況とその自己教育力に及ぼす影響，介護福祉学，Vol. 7，No.1，pp101-108，2000.

参考文献

- 1) 森 千鶴他：看護短期大学学生の自己教育力に関する研究，日本看護研究学会雑誌，Vol.15，No.3，pp24-35，1992.
- 2) 森 千鶴他：看護短期大学学生の自己教育力に関

する研究—他者との関係を中心に—，第23回日本看護学会（看護教育），pp250-253，1992.

- 3) 森 千鶴他：看護学生の学習と自己教育力，日本看護研究学会雑誌，Vol.17，No. 3，pp80-81，1994.